

序

「哲学者歴史学者にとり、言語は存在のためである。私にとって、存在は言語のためである。言語を生むための素材として、存在はある」と断言したのは吉川幸次郎氏である（『文弱の価値』、「訪中詩事」、筑摩書房、七三頁）。哲学と歴史学を一括することには反論もあろうし、「存在に到達すれば、言語は空蹄として捨てられる」とまで言い切られてしまうと、尚一層の疑義が呈されるに違いない。しかしながら、吉川氏の指摘を俟つまでもなく、西洋哲学のひとつの源流には、言葉は存在に到達する思索の過程にあるもの、あるいは存在をその真のありように相応しく語り出す手段である、とする思想がある。ここでは文学にも真なる存在との正しい出会いを模索する哲学的志向が要求され、それ故にこそ手段としての言葉の力についての厳しい反省が語られることになる。例えばプラトンは、極めて争論性の強い著作『イオン』の中でではあるが、「詩人は神々（の言葉）の伝達者である」と述べており、人間の言葉は哲学にせよ詩にせよ結局は存在を的確に語り出す神の言葉の模倣に過ぎず、最も成功した模倣の言葉であっても、存在に従う限りにおいてたかだか存在を想い起すための縁の地位に留められることになる。この思想は、プラトンよりも想像の自由や虚構的存在の創出をより積極的に認めるかに見えるアリストテレスにおいても継承され、「悲劇は行為と生のミイメシスである」『詩学』一四五〇a一六一七）との根本的命題の下に、詩作はまさしく人間存在の意味を語り出すことにおいて「歴史的記述よりもより哲学的であり一層真摯な洞察に富む」（同、一四五一b五一六）と語られているのである。存在との照応という観点より、哲学、詩作、歴史的記述の位階が定められていると云って良い。

とは言え、古典ギリシアの世界に言葉の物神化の傾向が見出されないという訳では決していない。あるいは世界最古の文藝批評とも見做されるアリストパネスの『蛙』においては、ディオニュソスがアイスキュロスとエウリ

ピデスの詩人としての優劣を判定するために、両者が各々自ら名文句と誇るところを秤にかけてその言葉の重さを比較するという方法を採用している。ここには、それがディオニュソスのそしてアリストパネスの真意ではないけれども、存在と言葉との照応という制約の影も見えない程に言葉の物神性が鮮かに表わされている。かかる制約をむしろ積極的に無視して力としての言葉を巧みに操り、自らの創り出す事象へと人々を誘うのは、典型的にはプラトンの描き出すソフィスト的修辞学である。従って、結果的には言葉の物神化という事態を招来することがあるとしても、「存在は言語のためである」と言う程に、文学の存在を積極的に認める思想はとりわけプラトンやアリストテレスには見出せないようである。

さて、吉川氏は文学の価値を積極的に評価する立場から、韓退之の「勃興すること李杜を得て、万類は陵暴に困しむ」という言葉を引いて、訪中の機にむしろ「杜はその素材とした自然をいかに変形し \wedge 陵暴 \vee しているか、それをこそ見たい」と述べている（七六頁）。新しい自然を造型する \wedge 能動の詩人 \vee （七五頁）としての杜甫を評価する思想は吉川氏の創る五言長詩に託されているが、その詩句中とりわけ注目を惹く言葉が「江山非助詩、詩使江山煖」である。それは吉川氏言うところの例えば「人は天地に非れば以て生を為すなし、天地は人に非れば以て靈を為すなし」（伝劉陶）に示される人本主義に通ずるものであろう。この五言長詩のことを筆者に教示され、自らはそれを蘇東坡解釈のひとつの拠り処とする山本和義氏は、現在小川環樹氏との共著として龐大な東坡詩集の註釈を着々と刊行されているが、その研究の一環として「僧清順新作垂雲亭」（蘇文忠公詩合註卷九、一〇七三年の作）を紹介し註釈している。この詩中にはまさしく「江山は詩を助くるに非ず、詩は江山を使得煖かしむ」に通ずる注目すべき思想がある。順序は逆となるが、「天憐詩人窮、乞與供詩本」とあり、しかし、その詩本（詩の素材）は模倣すべき美しい自然として供される訳ではなく、「天功爭向背」という秩序なき形で現われるから、詩作はこれを「詩眼巧増損」という方途をもって新しい秩序を創り出してゆかねばならない、と語

られていることがそれである。「江山餘り有りと雖も」それは未だ美の現実ではなく、江山は鎔化の働きをもつ詩眼を介してこそ始めて美となる、ということであろう。

詩人の窮するを憐れみ詩本を供する天と、自らの詩眼によって詩本を鎔化して美を創出する人とは、果して如何なる關係に立つのかについては、各々の文脈の中で、そして他の文脈ないし世界觀との比較において、天と人造物と詩人の關係がより原理的に更には形而上学的に考究されて始めて語りうることであろう。冒頭に引用した吉川氏の言葉が、とりわけ西洋の古代の思想との關係において、また中国の文學觀の文脈において、そして更により普遍的な位相において、何処まで妥当性を有しうるか、興味深い主題となるであろう。かかる存在と思惟と言葉の照応、哲学と文學の相關をめぐって、東と西、古と今とが微妙に交錯しまた離反してゆくのを見るのも、またひとつの楽しみである、と言うと言い過ぎであろうか。

ポイエーシスの総合研究をここ三年継続して行ったこともあって、このような序文となったが、それはさておき、今年度も幸いに研究室紀要第六輯を世に送り出す運びとなった。読者各位の御批正を賜ることを切に願う次第である。

昭和六十三年三月二日

藤田 一美